図書紹介・New Publications

魚類学雑誌
51(1): 69

□魚類学

愛知県近海の魚類. —中島徳男. 2003. 自費出版. 198 pp., 79 pls. 著者は地元である愛知県近海の魚類相を長年調査され，成果の集大成のようなものを出版したいという強い希望を持っていた. 2年ほど前にひょんなご縁があって原稿を読ませてもらう機会を得た. 原稿を受け取った時はその厚さもさることながら，45年間という調査期間の長さにも驚かされた. その時の原稿が改訂され，先ごろ出版された. 478種が報告され，各種について標本データ，標本に基づく簡潔な記載と備考が和文で付されている. さらに236種の白黒写真が載せられている. 愛知県近海をフィールドに調査をする方をはじめ日本の近海魚類相に興味のある人にとって有益な本と思われる. また，考察では日本の太平洋岸のいくつかの地域の魚類相との比較を行っている. この点でも魚類相の研究に興味をもつ多くの方の参考になるに違いない. 標本の一部はすでに豊橋市自然史博物館に登録・保管されており，残りの多くも同博物館に寄贈される予定. 本の入手方法は以下のとおり.

購入申し込み先：〒440-0071 愛知県豊橋市北島町字北島175 中島 徳男 宛

配布価格：一冊4,000円（送料込み）

送金方法：現金書留または郵便為替（送金前に著者へ残部の確認をしてください. TEL·FAX 0532-55-5438）. 入金確認後に著者から発送します.

（篠原現人 Gento Shinohara: 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部 e-mail: s-gento@kahaku.go.jp）

Functional anatomy of the vertebrates—An evolutionary perspective—. 3rd edition. —K. F. Liem, W. E. Bemis, W. F. Jr. Walker and Grande, L. 2001. Harcourt College Publishers, Orlando. 703 pp. ISBN 0-03-022369-5. 97.95$. 英語圏で生物学ないしは動物学を専攻する学生向けの標準的な教科書. 比較解剖学的な特徴の記述にとどまらず，機能と系統の両面からつっこんだ議論がなされている. 魚類を脊椎動物全体の枠からとらえるには格好の一冊. 巻末にふされた31ページにわたるグロッサリには，専門用語の語義に加え，発音と古典語の語源・語幹も示されている. 極めて有用で，これだけでも本書を購入する意義は十分にある. （佐々木邦夫）

Sensory processing in aquatic environments.—S. P. Collin and J. N. Marshall (eds). 2003. Springer-Verlag, New York. 446 pp. ISBN 0-387-95527-5. 149$ 本書は水圏環境における感覚に関する22論文を含む. 一部，無脊椎動物を対象としているが，魚類をあつかっている研究が圧倒的に多い. 神経生物学・感覚生理学分野での近年の進展を概観するのに役立つ.「Navigation and communication」や「Visual adaptations to limited light environments」などのように，「機能」や「環境」ごとに立てられた5章からなる. 各章に簡潔なイントロダクションが付されているので，門外漢にも比較的とりつきやすい.

（佐々木邦夫）

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
51(1): 69-70

会長からのご挨拶

学会誌にこのような会長の言葉を掲載するのは，これがおそらく初めてのことかと思います. 会員のみなさんと役員会・幹事会とのコミュニケーションの円滑化を図る一助に，という編集委員会のアイデアによるものですが，コミュニケーションの円滑化は好ましいことだと思いますので，会長を務めるにあたって，少し述べることにいたします.

本学会の活動はこの7~8年，ずいぶん変化・発展しました. その重要なポイントは，より多くの会員が力を出し合って学会の活動を支えるという方向で変化が進んでいることです. なかでもとくに大事だと思う点をいくつか挙げてみたいと思います.

第一は，ずっと東京で開いていた年会を，全国各地で開催するようにしたことです. 今年は沖縄で，来年は仙台で，という具合に，さまざまな地域で集うことができるようになったのは，素晴らしいことです. 年会は，学会の活動のなかでも根幹になるもののひとつです. 引き続き，全国の会員の力で年会を順に支えていっていただ

ければと願っています．年会を開催するには，少し前から準備が必要です．幹事会では来年より先のことも考えつつありますが，ぜひ次は自分のところでと，数年先を見すえての開催のご提案いただければと思います．

学会誌を英文誌「*Ichthyological Research*」と和文誌「魚類学雑誌」に分け，前者をSpringer社から発行するという改革も，重要なものでした．幸い，どちらのジャーナルもたいへん順調に発展を続けています．今後も発展を続けるには，なんと言っても，よい原稿がたくさん集まるということが肝要です．英文誌，和文誌それぞれにふさわしい原稿を，どしどしお寄せくださるようお願いします．

委員会活動を活発化したのも，最近の大きな変化です．標準和名検討委員会など，いくつもの重要な委員会が設けられましたが，なかでも自然保護委員会の設立は，大きな意味をもつものです．近年，人間活動の自然への影響は著しく大きくなっており，我々が関心をもつ魚類に甚大な悪影響を及ぼすことが頻発するようになってきました．また，魚類を通して生態系の攪乱に気づくということもあります．魚類に関心をもち研究をする者として，我々はいち早くそうしたことを知ることになるわけですが，知ったことは社会にしっかりと伝え，場合によっては学会として種々の提案をしていくということも大事でしょう．国や自治体が自然保護などに関して，パブリックコメントを求めることも急速に増加してきましたが，魚類にかかわることがらに関しては情報豊富な当学会が発言をしなければならない局面も多くなっています．これらの役割を学会が果たせるよう，自然保護委員会では，設立直後から旺盛な活動が展開されています．それぞれの地域でお気づきのことなどありましたら，自然保護委員会あるいは庶務幹事までお知らせください．

インターネットはますます我々の身の回りに浸透してきました．この条件をうまく活用することも，学会として真剣に取り組むべきことがらです．電子情報委員会はまだ設立されたばかりですが，さっそくこの問題に積極的に取り組んでいます．ウェブ上での年会参加申し込みの全面実施に向けて，現在，最後の調整が進行中ですし，学会のホームページの充実も図られています．ホームページのアップデートはこまめになされていますので，ぜひご覧になってみてください．なお，電子情報委員会というよりは編集委員会の担当事項ですが，学会誌への投稿の電子化も進められつつあるところです．これらによって，種々の活動を迅速に進めることが可能になりますので，学会諸活動の電子化にもぜひご協力ください．

数年前に学会賞（奨励賞と論文賞）が設けられましたが，これも新しい動きのひとつです．応募要綱などは，すべて学会のホームページに掲載してありますので，いつでも参照することができます．毎年，年末から年始にかけて，他薦・自薦を募集していますので，ぜひご応募ください．これまでのところ，応募数は必ずしも多くないようです．せっかく設けられた賞ですから，どうか積極的に応募，推薦をしていただくようお願いいたします．

今期の幹事会の体制は，会長：西田　睦，副会長：松浦啓一，庶務幹事：今村　央・宗原弘幸，会計幹事：仲谷一宏・矢部　衛です．また，このメンバーに会計監査：佐野光彦・林　公義が加わって役員会が構成されています．庶務幹事と会計幹事を関東地域以外の会員で担当するのは，おそらくこれが初めてです．幹事会メンバーのいる場所が東京と函館という具合に空間的に離れることになりますが，インターネットを最大限に利用すれば，スムーズな学会運営は十分可能であると考えています．今後は，幹事の仕事も全国の会員に広く担っていただくことにできればと考えています．ともあれ，今年2004年1月1日から2005年12月31日までの2年間，このメンバーで学会の運営をさせていただきます．これまでの運営方法のよいところを引き継ぎながらも，時代の変化に即応して必要な改革はこれからも積極的に進め，円滑な運営ができるよう努めたいと考えていますので，どうかよろしくお願いいたします．

（西田　睦 Mutsumi Nishida: 〒164-8639 東京都中野区南台1-15-1　東京大学海洋研究所海洋生命科学部門 e-mail: mnishida@ori.u-tokyo.ac.jp）

魚類学雑誌
51(1): 70-71

編集委員長からのご挨拶

本年1月1日より，前任の河野　博氏に替わって編集委員長を務めることになりました．どうぞよろしくお願い申し上げます．特にこれからは質の高い論文を多く集めるために，原稿受付から出版までの時間を短縮する必要が不可欠であり，編集委員会でも危機感をもって，この問題に取り組む所存であります．どうぞこれからも会員みなさまのご協力をお願い申し上げます．なお，***Ichthyological Research***の主任編集委員は国立科学博物館の篠原現人氏に交替し，魚類学雑誌の主任編集委員は引き続き中央水産研究所の片野　修氏が担当致します．

編集委員長交替にともない，原稿の送付先が次のように一部変更となります．なお，両誌の会員通信のうち生物学的新知見を含むものについては，査読制度を取り入れておりますので，ご了承願います．

Ichthyological Research（会員通信等を含む全ての原稿）

編集委員長宛：〒517-0703　三重県志摩郡志摩町和

具 4190–172 三重大学水産実験所 木村清志 Tel: 0599–85–4604 Fax: 0599–85–5492 電子メール：kimura-s@bio.mie-u.ac.jp

魚類学雑誌

総説と原著論文：上記編集委員長宛

書評，図書紹介，会員通信：魚類学雑誌主任編集委員宛：〒386–0031 長野県上田市小牧1088 中央水産研究所 片野 修 Tel: (0268) 22–1450 Fax: (0268) 22–0544 電子メール：katano@fra.affrc.go.jp

（編集委員長 木村清志）

魚類学雑誌
51(1): 71

Ichthyological Research 電子投稿方法の変更について

Ichthyological Research では従来からPDFファイルによる電子投稿を受け付けておりますが，本年1月より投稿方法をこれまでの電子メール添付ファイルから，シュプリンガー・フェアラーク東京のFTPサーバーにアップロードする方式に変更いたしました．これは大きなファイルを安全に送受信するためです．今後原稿ファイルサイズの限度は特に設定いたしませんが，査読者に送付することを考慮すると，10 MB程度以下にしていただきたいと考えております．アップロード先のホスト名（アドレス）は ftp.springer-tokyo.co.jp (ftp://ftp.springer-tokyo.co.jp) で，ユーザー名 (ID) irsubmit，パスワードichthyolresとしてログインして下さい．ファイルのアップロードには一般にFTPクライアントソフト（マイクロソフトウィンドウズ環境ではフリーソフトのFFFTPなど）が便利ですが，マイクロソフトインターネットエクスプローラー (MS-IE) などのブラウザーでも可能です．MS-IEでは［アドレス］にftp.springer-tokyo.co.jpと入力してエンターキーを押し，サーバーにアクセスします．その後，MS-IEの［ファイル］–［ログイン方法］でログイン画面が表示されますので，ここで上記のユーザー名，パスワードを入力し，ログオンボタンを押します．これで***Ichthyological Research***の投稿フォルダーにログインできます．このフォルダーには Welcome to Ichthyological Research.txtファイルがあり，これが表示されればログイン成功です．後は，投稿したいファイルをこの投稿フォルダーにドラッグアンドドロップすればアップロード完了です．なお，一旦アップロードされたファイルは投稿者自身ではダウンロードあるいは削除はできません．もし，誤ったファイルをアップロードされた場合は，編集委員長宛，ご連絡下さい．こちらで削除致します．

電子投稿用の原稿は従来どおり，本文，表，図，和文要旨などを単一のPDFファイルとして作成されたものに限ります．また，原稿にはページ番号および連続した行番号を必ずつけ，原稿ファイル名には投稿者名を含むようにして下さい．なお，受付手続きを迅速に行うために，投稿者は原稿ファイルをアップロードする前に必ず，1) 投稿者 (Corresponding author) 名（英文，和文），2) 連絡先住所（英文，和文），3) 電話およびファックス番号，4) 電子メールアドレス，を上記編集委員長宛に電子メールでご連絡下さい．PDFファイルの作成方法や原稿のアップロードに関してご不明な点やご質問がございましたら，編集委員長宛にお気軽にお尋ね下さい．

（木村清志 Seishi Kimura: 〒517–0703 三重県志摩郡志摩町和具4190–172 三重大学付属水産実験所 e-mail: kimura-s@bio.mie-u.ac.jp）

魚類学雑誌
51(1): 71

学会ホームページについて

2004年1月より学会ホームページ（アドレスはhttp://www.fish-isj.jp/index.html）が一新され，より便利になりました．例えば，今年度から年会への参加をホームページから申込むことができます．ぜひ一度ご覧下さい．

（電子情報委員会）

魚類学雑誌
51(1): 71

国際学会案内

第7回 Indo-Pacific Fish Conference のお知らせ

第7回 Indo-Pacific Fish Conference (IPFC) の開催要項について，組織委員会の委員長であるProf. Kwang-Tsao Shaoから連絡がありましたので，会員の皆さんにお知らせします．開催場所は台湾の台北で，会期は2005年5月15–20日です．現在，以下の14のシンポジウムが予定されています (Pelagic fishes, Deep-sea fishes, Coral reef fishes, Freshwater fishes, Molecular evolution, Chondrichthyans, Larval fishes, Coastal fishes, Phylogeography, Marine aquarium fishes, Reproductive mechanisms, Marine protected areas, Fish database, Conservation of freshwater

fishes). 新たなシンポジウムを組織することもできますので，希望者は2004年6月30日までにシンポジウムの概要，演者の氏名と所属などをipfc7@sinica.edu.twへご連絡下さい．IPFCに関する詳細はhttp://www.ipfc7.org/をご覧下さい．IPFCに関する重要な日程は以下のとおりです．

2004年10月31日：Expression of Interest formの提出締めきり．

2004年12月31日：3rd circularの印刷．

2005年1月31日：講演要旨提出締めきり．

2005年2月28日：事前登録申し込み締めきり．

台湾で開催されるIPFCからPieter Bleeker賞が設けられることになりました．この賞はインド・太平洋産魚類の系統分類学及び生態に関する傑出した業績を出版した研究者に対して与えられます．受賞者は1-2名で，賞状と賞品がIPFCの「さよならパーティー」で授与される予定です．応募は他薦，自薦のいずれでも構いません．候補者の履歴書，業績内容および魚類学への貢献を記した書類を2004年11月30日までにBleeker賞委員会委員長であるオーストラリア博物館のDr. Jeffrey M. Leis (e-mail: jeffl@austmus.gov.au) にお送り下さい．

（松浦啓一 Keiichi Matsuura: 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部 e-mail: matsuura@kahaku.go.jp）

魚類学雑誌
51(1): 72-74

トピックス

西表島の陸水性魚類に迫る絶滅の危機

はじめに

西表島は，琉球列島の南西端（北緯約24度19分，東経約123度49分）にある面積約300 km^2，周囲約130 kmのひし形をした島で，沖縄県下では沖縄島に次ぐ大きな島である．日本最後の秘境，原始の島と称され，イリオモテヤマネコの生息で有名なこの西表島の自然環境が，今，人間活動の活発化によって空前の危機にさらされている．魚類についても例外ではなく，著者らは過去30年にわたってこの島に通い，陸水域や浅海域の魚類調査を続ける中で，その深刻な影響が近年急加速していることを実感している．本稿では，特に顕著な影響を受けやすい陸水性魚類の窮状について訴えたい．

(1) 大型リゾートホテルの開業

2004年4月，西表島の北部，トゥドゥマリ浜（通称月が浜）に，島民（約2000名）の半数弱が1度に宿泊可能な大型リゾートホテルが開業した．

トゥドゥマリ浜は，島の中央から北西に流れる種子島以南では最長の河川である浦内川（全長39 km，主流長18.8 km，流域面積約60 km^2）の河口の一部である．浦内川ではこれまでに約360種の陸水性魚類が確認されている（鈴木，未発表）．最後の清流と言われる高知県四万十川でさえ仔稚魚もあわせて120種（川那辺・水野編，1989）であるから，浦内川はおそらく日本一の種多様性を誇る河川である．希少種や貴重種の多様性の高さも日本一で，環境省によるレッドデータブック（環境省野生生物課編，2003; 以下RDBとする）に掲載されている絶滅危惧種76種の内，約20%に相当する15種（ウラウチフエダイ，コンジキハゼなど）を産するだけでなく，将来RDBに掲載される可能性が高い種が17種（カワクモハゼ，ナミノコハゼなど），日本では浦内川だけから記録がある種が13種（ナミダカワウツボ，ウラウチヘビギンポなど），未記載種が10種（イソハゼ属の1種，ニラミハゼ属の1種など），未報告の日本初記録種が13種（ボラ科の1種，ホタテツノハゼ属の1種など），淡水性の大型遊泳魚が12種以上（ナガレフウライボラ，ニセシマイサキなど），超大型魚類が4種以上（オオメジロザメ，アカメ属の1種など）生息する他，水産上重要な種も19種（ギンガメアジ，ゴマフエダイなど）みられる．

問題は，浦内川に生息する魚類の内，キバラヨシノボリ1種を除くすべての魚類が通し回遊魚か周縁性淡水魚であり，これらの魚類にとって河口域は主たる住みかであり，河川と海を往復する際の通過地点であり，さらには稚魚期の生育場になっていることだ．ここに大型リゾートホテルが開業した．日本魚類学会はかねてからその建設や開業に伴う魚類や生態系への悪影響を予想・危惧して，適切な環境アセスメントの実施を要望してきた（日本魚類学会，2003）．しかし，簡単な水質検査と不十分な生物調査が開発業者によって言い訳程度に実施されたのみで，適切な環境アセスメントは実施されないまま工事は急進行した．そして，取水の問題，排水の問題，ゴミ処理の問題，夜間の照明や騒音の問題，除草剤の問題，観光客数の急増による様々な問題などを残したまま開業に至っており，今後も14ヘクタールにおよぶ開発が計画されている．

このリゾート問題については，浦内川流域全体を含む同地のモニタリング調査を実施し，その結果を公表することで理解を得ていく必要があると考えている．

(2) ゴミ問題

西表島にはゴミを処理する施設はこれまで一切建設されていない．幾つかの地区ごとに決まった谷間のゴミ捨て場に，生ゴミから車までが投棄されている．夏場の悪臭の猛烈さと，ハエの多さは想像を絶するものがあり，大自然を観光の目玉にする西表島の陰の部分である．時折，火がかけられ，煙が上がっているのを見るが，焼却時に発生するダイオキシンへの対策はまったくとられて

いない．それは谷筋から河川へと流れ出て，水質汚染を引き起こしている可能性がきわめて高い．

(3) 観光客数の急増による影響

観光客が次々にドボン，ドボンと水音をたてながら淵に飛び込む．歓声が上がる．その数，約30名．それまで，岩の上で落ち着いて餌を食っていたナンヨウボウズハゼはその度にびくびくし，耐えきれずにどこかに姿をくらました．

島の北東部に流れ出るユツン川は，小河川ながら魚類豊富な川であった．渓流域には非常に多くのナンヨウボウズハゼが生息していた．しかし，数年前から徐々に減少し始め，ある年の夏にはほとんど姿が見えない状態になった．なぜ減少したのかしばらく見当がつかなかったが，ある時上述の光景を目の当たりにしてその原因がよく理解できた．1団体30名，1日数団体が訪れ，それが夏中続くとすれば，ナンヨウボウズハゼは落ち着いて餌も食えず，再生産もままならない．また，この淵にはミナミハゼやクロミナミハゼが多数いたが，これら非常に敏感な魚類は真っ先に姿を消した．観光客は，河口近くのマングローブ林を伐採して造成した道を通るか，カヌー桟橋からカヌーを漕いで感潮域最上流部までやってくる．さらに，枝を払い，根を踏みならした道を通りながら，この淵までやってくるのである．

森林を弱らせ，魚に大きな負の影響を与えるツアーは，さらに新天地を求めて，これまで人があまり入らなかった島の北西部へと進出している．大型リゾート施設が開業した今，観光客数の急増が予想され，立ち入り制限をするなど、早急な対策が必要である．

(4) 圃場整備等による湿地の消失

かつて，西表島には多くの淡水性湿地が点在し，タナゴモドキやタメトモハゼなどの生息地となっていた．しかし，1980年代に島の各地で行われた道路整備や圃場整備などにより，その多くが消失し，この2種のハゼがRDB種に選定される理由となった．コンジキハゼのタイプ産地 (Prince Akihito and Meguro, 1975) に隣接する住吉地区の大規模な湿地帯も牧場として整備され、この時期に壊滅的な打撃を受けている．

その後，一旦は落ち着いたかに見えたが，2003年秋，大保良田（大原田とも表記される）において，西表島では規模の大きい部類に入るであろう水田地帯で圃場整備が開始された．大保良田は島の南東部の大原集落の西側に位置し，隆起石灰岩の台地に囲まれた小水路を伴う湿地で，下流はサジ川となってマングローブ林を抜け、最終的には海に通じている．著者らが約30年前に訪れた頃には，稲作が行われ，美しい田園風景が広がっていた．水は水田伝いに流れ，畦は草深く，田は泥深く，水田の角には腰までの水深の溜まりがあった（図1A）．ここにはタナゴモドキやチチブモドキなどが多数みられた．また，水田内の溜まりはギンブナの生息地となっていた．その後，稲の栽培は中止され，約15年前には荒れ田に

図1. 西表島の窮状．A: 大保良田（1976年3月）; B: 大保良田（2004年2月）; C: ホネラ川（1995年12月）; D: ホネラ川（2003年8月）．

なり，田は乾燥化が進み，素堀の用水路に水がある程度であったが，2002年に行われた調査でも，前2種の生息は確認されていた（井口ほか，2003; この報告では保全上の理由から場所が伏せられているが，後述の理由によりもはやその必要はなくなった）．

この水田地帯で，2001年度から開始された県営圃場整備は，2004年2月の現地視察の際には大部分が終了しており，残る一部で重機がうなり声をあげて整地が進められていた．以前の面影はどこにもなく，辺り一帯は人工構造物を多用した圃場が広がり，コンクリート製のU字溝が縦横に走っていた（図1B）．おそらく，西表島唯一とも言えるギンブナ個体群は，そのルーツも明らかにされぬままに絶滅したと考えられる．ここでも，事業実施前に環境アセスメントが行われたという情報は，著者らの知る限りない．

(5) 道路と橋の建設

島の北東海岸沿いに，緩やかなカーブを持った2車線の広く綺麗な舗装道路が走っている．山側に木々の緑，反対側に綾に織りなす海を眺めながら快適なドライブが楽しめる．もともと，ここには曲がりくねった狭い道路が通っており，川を渡る古ぼけた石橋の下流にはマングローブ林が点在し，多くの汽水魚が生息していた．ホネラ川という細流はヨウジウオ類が豊富に生息し，ジャノメハゼやアゴヒゲハゼといったRDB種のほか，未記載種や日本初記録種も多数採集されていた（図1C）．しかし，その生息場所は，昨年，新しい橋と新しい道の下となり，付近のマングローブ林も伐採された（図1D）．

西表島では今，道路の拡幅工事，新しい道路の整備，橋の架け替えなどが周りの環境への配慮なしに急ピッチで進められている．もちろん，事前に環境アセスメントが行われたという情報は著者らの知る限りない．

(6) 川筋の変更

西表島の北東，ホーラ川の川沿いに温泉施設がある．この施設建設の際，川筋を変更している現場を確認した人物がいる．日本の河川の川筋を私企業が変更できるのだろうか？　疑問である．

(7) 西表島の陸水性魚類の将来

このほか観賞魚業者による乱獲，飼育マニア間の口コミによる生息地情報の拡散，3面コンクリート護岸の河川の増加など，西表島に生息する陸水性魚類の現況は実に厳しい．30年前には，水たまりに網を入れれば，すぐにたくさんの魚が見られたものである．最近ではかつて著者らがフィールドとしていた河川の多くは荒廃し，魚類の多様性は明らかに低下している．原始の島の自然が，本土なみにならぬよう，小規模開発であろうとも，必ず環境アセスメントを実施し，島の生態系への影響を最小限に抑える努力が必要と考える．

引用文献

井口恵一朗・淀　太我・片野　修．2003．西表島の水田用水系に出現する魚類の生息環境．魚類学雑誌，50: 115–121.

環境省野生生物課編．2003．改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－4　汽水・淡水魚類．自然環境研究センター，東京．230 pp.

川那部浩哉・水野信彦（編・監修）．2001．山渓カラー名鑑：改訂版日本の淡水魚．山と渓谷社，東京．719 pp.

日本魚類学会．2003．ユニマット不動産による西表リゾート開発の中断と環境影響評価の実施を求める要望書．http://www.fish-isj.jp/info/030612b.html.

Prince Akihito and K. Meguro. 1975. Description of a new gobiid fish, *Glossogobius aureus*, with notes on related species of the genus. Japan. J. Ichthyol., 22: 127–142

（鈴木寿之 Toshiyuki Suzuki: 〒661–0002 尼崎市塚口町 兵庫県立尼崎北高等学校 e-mail: suzuki-toshiyuki@pop21.odn.ne.jp，瀬能　宏 Hiroshi Senou: 〒250–0031 小田原市入生田499　神奈川県立生命の星・地球博物館 e-mail: senou@nh.kanagawa-museum.jp）

魚類学雑誌
51(1): 74–75

新知見紹介

宮城県沿岸にハタハタは出現する

ハタハタは日本海沿岸，宮城県以北の北日本，オホーツク海からカムチャッカ半島東岸までの北太平洋に分布するとされている（Okiyama, 1991; 尼岡ほか，1995）．岩手県では船越湾で本種が採集されたことが丸山（1971）によって記録されている．筆者は宮城県における本種の分布を確認するために文献を漁ってみたが，具体的な分布記録を探し出せなかった．しかしながら，宮城県以南の海域における魚類報告を調べたところ，福島県および茨城県の魚類相に本種が含められていることが分かった（舟橋，1985; 平川ほか（編），1995）．筆者は宮城県沿岸で採集されたハタハタ1個体を入手する機会を得た．東北地方の太平洋岸における本種の出現記録は貴重と考えられるのでここに報告する．

入手した標本は2001年10月16日に鮮魚商が石巻魚市場で仕入れた個体である（宮城県水産高校に保管：登録番号MFHS-1138）．この鮮魚商によると，本個体は宮城県沿岸において底曳網で漁獲されたことは間違いないが，詳しい漁獲場所は不明とのことであった．また，過去に2–3回数尾のハタハタを仕入れたことがあったという．本標本（全長218 mm，体長185 mm）の計数計量形質を示すと次の通りである：

背鰭鰭条数X-14; 臀鰭鰭条数30; 胸鰭鰭条数26; 鰓耙数6+15．体高は体長の25.0%; 頭長は25.4%; 眼径は5.8%; 両眼間隔は7.0%; 尾柄高は7.3%; 胸鰭長は30.1%; 腹鰭長は15.3%.

今回の記録はハタハタが宮城県沿岸に出現することを具体的に実証したことになるが，すでに述べた通り，宮城県以南の福島県および茨城県にまでも南下することがあると判断される．落合・田中 (1986) は東北地方の太平洋岸に出現するハタハタの系群を「北海道太平洋側から三陸地方にかけて生息する北海道南群」と記述しており，主生息地である北海道太平洋沿岸からどのような条件の時に宮城県以南にも南下してくるのか興味がもたれる．

最後に標本の入手にご協力頂いた石巻市在住の鮮魚商亀山公則氏および宮城県水産高校瀬戸訓夫教諭にお礼申し上げます．

引用文献

尾岡邦夫・仲谷一宏・矢部　衛．1995．北日本魚類大図鑑．北日本海洋センター，札幌市．390 pp.

船橋正隆．1985．茨城県の海産魚類目録．茨城県立日立北高校紀要，(1): 1–13.

平川英人・江部建一・石田敏則・田中利幸（編）．1995．福島の海産動物方言集—魚の呼び名—．福島県水産試験場調査研究資料，(243): 1–103.

丸山　潔．1971．岩手県魚類目録．岩手県水産試験場研究報告，(1): 1–70.

落合　明・田中　克．1986．新版魚類学（下）．恒星社厚生閣，東京．xvii+764 pp.

Okiyama,M. 1990. Contrast in reproductive style between two species of sandfishes (Family Trichodontidae). Fish. Bull., U.S., 88(3): 543–549.

（座間彰 Akira Zama: 〒986–2113 石巻市宇田川町1–24 宮城県水産高校）

魚類学雑誌
51(1): 75–76

イシドジョウ *Cobitis takatsuensis* に見られた頭部の奇形および斑紋異常

Head deformity and abnormality of body coloration observed in local populations of *Cobitis takatsuensis*

愛媛県重信川水系においてイシドジョウの分布調査をおこなった際，頭部の形態異常と斑紋異常の個体がそれぞれ1尾ずつ認められたので報告する．これら異常個体は他の正常な個体と共に手網で混獲された．頭部異常個体は1997年9月22日に重信川の1支流から，斑紋異常個体は1996年8月28日に本流上流域から得られた．頭部異常個体は体長51.6 mmの雌成魚で，吻端が潰れたような形状を呈しており，口は斜め前方に向かって開口していた (Fig. 1)．ホルマリン固定標本の軟X線撮影による観察では，正常個体と比べて口蓋骨，外翼状骨，上篩骨が極めて短く変形していた．頭部以外の外部形態と斑紋に，特に異常は認められなかった．斑紋異常個体は体長32.5 mmの雌若魚で，体の全般にわたって黒色素が欠乏しており，地色の白色部も透明がかっていた (Fig. 2)．また，胸鰭基部後端から臀鰭基部前端にかけての腹中線に沿って10数個の黒色素が一列に並んでおり，これは本種の初期発育段階に決して見られない特徴である (Shimizu et al., 1998) ことや，眼球の色が正常であったことから，この斑紋異常はいわゆるアルビノではなく，発育途上での色素の異常発現と思われる．斑紋以外の外部形態や計数形質は，同時に得られた正常個体と差異はなかった．これら形態および斑紋異常個体が得られた地点はいずれも，水系を通じた分布調査により比較的イシドジョウの個体群密度が高いと判断された地点（清水，

Fig. 1. Head deformity specimen of *C. takatsuensis*. TKPM-P 17549, 51.6 mm SL (Female).

Fig. 2. Body color anomalous specimen of *C. takatsuensis*. TKPM-P 17550, 32.5 mm SL (female).

2003）に含まれていた．イシドジョウは現在，各生息地点の個体群間で移動があまり頻繁でなく，個体群規模も決して大きくないと推定されているため（清水，2002），これら異常個体の出現は近親交配に起因している可能性がある．今後個体群内における遺伝的多様性の解析や，環境条件の評価と言った調査が必要であろう．なお，今回得られた個体は全て徳島県立博物館魚類資料（TKPM-P）として登録，保管した．

引用文献

清水孝昭．2002．愛媛県の2河川におけるイシドジョウの生活史．魚類学雑誌，49: 33–40.

清水孝昭．2003．愛媛県におけるイシドジョウの分布および生息状況．魚類学雑誌，50: 153–158.

Shimizu T., H. Sakai and N. Mizuno. 1998. Embryonic and larval development of a Japanese spinous loach, *Cobitis takatsuensis*. Ichthyol. Res., 45: 377–384.

（清水孝昭 Takaaki Shimizu: 〒799–3125 愛媛県伊予市森121–3 愛媛県中予水産試験場 e-mail: simizu-t@bea.hi-ho.ne.jp）

魚類学雑誌
51(1): 76–77

モイヤーさんの思い出

Memories of Dr. Jack T. Moyer (1929–2004)

平成16年の正月早々，余吾　豊さん（アンダーウオーター・ナチュラリスト協会代表）からモイヤーさんが亡くなったという衝撃的な電話連絡を頂いた．どうすればいいのだろう？　取り敢えずモイヤーさんと親しかった人たちに連絡をと思い，国内については余吾さんがしていてくれるはずなので，外国はと考えて直ぐに思いついたのは，グゥアム大学のTerry J. Donaldson博士だった．「今年最初のメールは悪いニュースだ」とモイヤーさんが亡くなったことを伝えた．直ぐに「本当に悪いニュースだ」との返信が来た．どうしてという気持ちと，何があったのだろうという気持ちが交錯して，しばらく時間が流れた．

TMBSのジープの上でくつろぐ若き日のモイヤーさん（余吾　豊氏撮影）

私がモイヤーさんと知り合ったのは，丁度30年前の1974年のことである．きっかけは，モイヤーさんが魚類学雑誌に投稿したニシキベラの産卵行動の原稿の校閲依頼であった．私は30歳そこそこの若輩者であったが，ニシキベラの性転換についての記述がなかったので，生意気にもそのことを指摘した．直ぐに，Reinboth (1974) の論文のコピーを送ってくれないかとの手紙が来た．モイヤーさんにそのコピーを送る際に付けた私自身の手紙のコピーと，コピーを送ったことに対するモイヤーさんからの日本語のお礼の手紙が，私のJack T. Moyerファイルの一番下に残っている．

私が「三宅島は海水がきれいでベラの種類も多いのでうらやましく思います」と書いたせいかどうか分からないが，その後三宅島に来ないかとのお誘いを再三受けた．当時私は学位論文の取り纏め中ですぐには果たせなかったが，1975年4月17日三宅島に渡る東海汽船の中にいた．経験が浅く英語も話せなかったので，初対面のとき何と挨拶すれば良いのだろうと，眠れないまま英語をいろいろ考えていた．その下書きが私の三宅島野帖の第1頁である．船が三宅島に着くと，夜が明けてやっと空が明るくなった早朝，モイヤーさんはジープで出迎えに来ていてくれた．さあ英語で何と話そうかと迷っているときに，流暢な日本語で「おはよう」．以来，私がモイヤーさんに英語で話しかけることは，特別な場合を除いて無かった．

当時の三宅島には多くの外国の研究者が訪れており，お世辞にも広いとは云えない田中達男記念生物学実験所（TMBS）は大賑わいであった．おかげで多くの外国の研究者と知り合いになることが出来た．皆，昼間潜水し，疲れているはずなのに夜遅くまで標本の整理をし，大変精力的に研究を続けていた．とくに，John E. Randall博士とは，畳敷きの同じ部屋に寝泊まりし，昼間の標本の採集から深夜にいたる標本写真の撮影まで付き合わせていただいた．そんな中，Randall博士とモイヤーさんのやり取り，あるいは一緒に潜った後の会話を通じて，モイヤーさんの分類学の知識の深さに舌を巻いたものである．

次のお誘いは，レンテンヤッコの性転換を一緒に調べましょうというものであった．レンテンヤッコの居る富賀漁港の沖のリーフまで連れて行ってもらう時に，長身

のモイヤーさんの速い泳ぎに付いて行けず，エアーを消費してしまい，作業半ばで岸に戻らないといけないこともあった．モイヤーさんは社会構造を，私は生殖腺の組織学的検討と産卵行動の写真撮影を担当した．一緒に潜り始めても，私が産卵行動の撮影に熱中している間，モイヤーさんの姿が日没後の薄暗い海中に消えてしまうことがしばしばあった．それまでの数年間の観察により，モイヤーさんはすでに社会構造を把握しており，観察していた個体の体色変化により性転換を確信していたものと思われる．私の推測では，その時モイヤーさんは，次の研究であるearly sex changeやシマウミスズメの産卵行動を観察していたのではないかと思っている．レンテンヤッコとほぼ同時進行で，日本産クマノミ類6種の性転換の研究も行った．モイヤーさんは民宿から民宿へと南日本を飛び回りながら，石垣までの各地で採集したクマノミ類6種の標本を九州大学まで送ってくれた．私は標本の測定と生殖腺の組織観察を行ったが，標本には繁殖期の成熟した卵巣から，生殖腺を取り出すことの困難な未熟な個体まで含まれており，いろんな方法で切片を作らなければならず，苦労をしたことが思い出される．

富賀漁港の堤防の上で待ち受け，モイヤーさんがタモ網で捕まえてきたシマウミスズメの硬い腹部をハサミで大きく切り開き，生殖腺を取り出したこともあった．その様子を見てモイヤーさんは，涙が出るくらいシマウミスズメを可哀想と感じていたらしい．

この時期，モイヤーさんの魚類生態研究は最も充実していたと思われる．その集大成が1984年の第2回インド・太平洋の魚類に関する国際研究会議であったろう．モイヤーさんがコンビナーを務めたセッション“Reproductive Ecology and Evolution of Reef Fishes”で研究発表を行ったのは，Miles H. A. Keenlyside: Thomas F. Hourigan and Ernst S. Reese: 柳沢康信・越智晴基: George W. Barlow: Eric A. Fisher: 桑村哲生: Philip A. Hasting: Robert R. Warner: Robert R. Ross: Douglas Y. Shapiro: 余吾　豊: Patrick L. Colin and Lori J. Bell: Ronald E. Thresher: 四宮明彦: Muki Spigel and Lev Fishelson: Lev Fishelson, Linn W. Montgomery and Arther A. Myrberg氏らであった．飛び入りでEugenie Clark女史の発表もあった．共同コンビナーではあったが，若輩の私など論文でしか名前を知らない著名な人達が名前を連ねていた．この会議を通じて私は多くの外国の研究者と知り合いになることが出来た．研究者としての大きな財産をモイヤーさんからいただいたと思っている．

学位論文の英文要約に始まり，いくつの英語論文を見ていただいたことだろう．1985年，国際サンゴ礁学会で口頭発表する事が決まった時は，初めて飛行機で三宅島に渡り，モイヤーさんの前で口頭発表の練習をし，発音を直していただいた．Monthsやfemaleの発音が悪くて直されたこと，学名*Parapercis snyderi*をどのように発音したら良いのかを教えてもらったことも懐かしい．

モイヤーさんの研究は，その後白保のサンゴ礁研究，イルカ類の生態，自然保護教育へと展開して行くが，モイヤーさんとの手紙のやり取りは1989年5月まで続いている．その間モイヤーさんからいただいた手紙の総数は，私の手元に残っているだけでも71通におよぶ．これらが遺品となってしまった事は残念である．モイヤーさんは充分に必要なだけ生きられたのかも知れないと感じると同時に，慕っている多くの若い人達やご家族が居られただけに，早すぎたとの思いも強い．

今となっては，心からご冥福を祈るのみである．ありがとうございました．

（中園明信 Akinobu Nakazono: 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1　九州大学大学院農学研究院　動物資源科学部門　e-mail: nakazono@agr.kyushu-u.ac.jp）

会記・Proceedings

魚類学雑誌
51(1): 77–79

2003年度第4回幹事会

2003年12月3日（水），於　東京海洋大学

出席者：松浦，西田，萩原，今村，川瀬，茂木，岡部，須之部

1．2003年度年会について，会計報告と反省点についての報告があった．

2．電子情報関連について，ホームページとメーリングリストの管理・運営について検討した．

2003年度第1回日本魚類学会標準和名検討委員会

日　時：2004年1月9日15:00～17:30

場　所：国立科学博物館分館

出席者　委員長：瀬能　宏（神奈川県立生命の星・地球博物